

令和5年度 仙台市PTA指導者研修会

2023・6・7

「今、改めて不登校を考える 子どもの気持ち、親の気持ちとその支援」

奈良女子大学 伊藤美奈子

不登校に対する国の指針の変遷

～1980年代：不登校の増加（心の病気から教育問題へ）

カウンセリング・マインドの広がり

1992年 “どの子にも起こり得る” “待つことの大切さ”

～2000年頃：不登校の多様化（教育問題から社会問題へ）

2003年 “ただ待つのみではなく、正しいアセスメントに基づく
適切な働きかけや関わりを”

2000年代以降：“不登校＝問題行動”ではない（教育機会確保法）

2016年：“不登校というだけで問題行動とみなさない”

“学習する権利（多様で適切な教育機会）の保障”

「問題ではない」と言われても

もちろん「問題ではない」と言われることで

ゆっくり休める子ども、ホッとする保護者もいる

しかし、「問題ではない＝そのままでもいい・何もしなくていい」

という誤解もある

しかも、子どもや保護者の不安や心配は、完全には払拭されない



＜継続的支援＞＜進路の見通し＞は必要

不登校の子どものこころ1

- ◇不登校の子どもたちは、行きたい？ 行きたくない？
“あのしんどい学校には行きたくない、でも行けるものなら学校には行きたい” “でも、行きたいと言ったら…”
- ◇どうして行けないの？
理由は“よくわからない” “簡単に説明できない”
だから“聞かないでほしい” “追い詰めないでほしい”
(聞き方次第で、プレッシャーや非難に聞こえてしまう)

不登校の子どものこころ2

◇学校もしんどい。家は？

“家だと安心できる” しかし “家でも心から安らいでいない”

“母のため息” “時計の秒針の音”

ゲームやPCに没頭するのも、昼夜逆転も “隠れ蓑”

◇家族はどう思っているのだろうか？

「学校に行かない私も認めて」…… “母の肩の線”

不登校の子どものこころ3

◇親への一番の思い＝「わかってほしい」

↓↑

- 悩みの中身は一人一人違うし、簡単に言葉で説明できない
（説明してくれない）ことが多い
- 行動や身体で表現するケースもある（行動化・身体化）
- 突っ張っていても、心の中では詫びていることも多い
詩『母親』より

不登校の子どものこころ4

◇「そっとしておいて」は「何もしないで」ではない
「いつもどおり」「ふつう」でいてほしいとは？

◇学校の先生に求めること… “ロープの先”

引っ張り過ぎても困る
離されたらもっと困る

不登校の子どものこころ5

◇行きつ戻りつを繰り返しながら

“まだ「まだら」だけど” という言葉

⇒「はしご」の外し方・外し時が大切

⇒たとえば“真っ白”にならなくても、

“不安を抱えながらの前進”もある

不登校の子どもを持つ保護者の思い

「子どもを支える人」も支えられる大切さ

◇不安・苛立ち・悲しみを吐き出す
…… “あの子に裏切られた！”



負の感情を、安心して安心な人に吐き出せる場

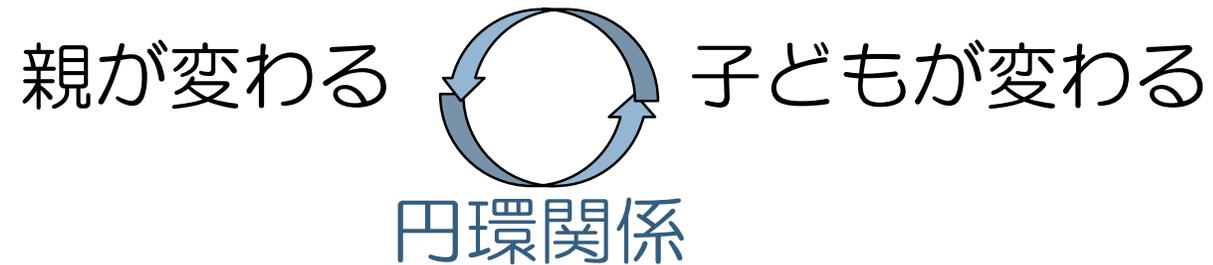
◇相談できる場や人の大切さ
…… “お母さんにはカウンセリングに
行ってほしくなかった”



子どものためだけでなく、保護者自身のために

保護者を支える意味

◇親に原因があるのでは決してないが、



肩の力を抜く、視点を变える、
笑顔を取り戻す、SOSが出せる
(セルフコンパッションの大切さ)

参考図書



ご清聴、ありがとうございました。